

【実践報告】

教育実習Ⅴ・Ⅵ（中・高）の報告

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 准教授 黒 木 晶 子

グローバルコミュニケーション学科 教授 笹 原 豊 造

1 はじめに

教育実習Ⅴ・Ⅵは中学校・高等学校教員としての適性を確認し、その資質を伸長するために行われるものである。大学で学んだ理論と教育現場での実践がどのように関連するかを実習で学ぶ。実習校で指導担当教諭の指導のもと、授業参観、教材研究、授業実施、学級指導などを行う。

2 実施のスケジュール

項目	時期	主な内容
事前学修 (学内)	4月～5月	・ 本実習の意義、目的、心構え等を再確認する。 ・ 実習校への事前訪問により、指導担当教諭等の指導担当者に、担当となる学級の生徒の実態や、指導計画、担当授業の内容を確認する。 ・ 教材研究、模擬授業を行う。担当教員による指導、実習生相互の検討作業を通して、よりよい教材・授業になるよう工夫を重ねる。
本実習 15日間 (学外)	5月～6月	・ 実習の内容は実習校により計画される。主な内容として、①指導担当教諭等からのオリエンテーション、②授業参観、③教材研究、④授業担当、⑤生徒指導、⑥その他の学校・学級運営に関わる諸業務が挙げられる。 ・ 実習中は教育実習日誌等の記録をつけ、中学校・高等学校教員の役割・業務等について理解を深める。
事後学修 (学内)	7月 報告会は 7/22に実施	・ 各自の実習を振り返り、報告書をまとめる。 ・ 各自の実習内容について報告会で報告する。報告会では、教育指導、生徒指導、校務等を通して学んだことを発表する。

3 活動の概要

○教育実習を通して学んだこと（学生の報告資料より抜粋）

・ 先生方は、学習することの意義を理解させることの他に、毎回の授業を工夫するために活動を変えることはもちろんだが、授業の山場の雰囲気を変えるという工夫もされていた。生徒の実態把握や教材研究、授業構成をしっかりと行った後、それに適した教師なりの独自の工夫をすることや毎回の授業が新鮮に感じられるような工夫を行うことで、生徒の学習意欲を高めることができるということを学んだ。

- ・多様な悩みを抱えている生徒たちと関わる中で、教師には、長期的な視点を持って、生徒一人ひとりと誠実に向き合い、一緒に解決に向けて取り組んでいく姿勢が求められていることを改めて学んだ。
- ・職員室では、その日の生徒の様子をオープンに伝え合う雰囲気があり、職員間での共通理解が徹底されていた。私も共通理解ということを心がけ、連携を忘れないようにしたい。
- ・教師の多忙さを知ることができた。出張や研修など校外への移動も多くあり、一日中全ての先生方が揃われる日はほとんどなかった。特に、担任を持つ先生は、教科指導や部活動指導に加え、朝・終礼やあゆみ・自学ノートの点検なども行わなくてはならないため、限られた時間の中でいかに効率良く物事をこなしていくかが重要であるということを知った。
- ・実習を通して、様々な場面で「学び続ける教師」の姿を見ることができ、その先生方のおかげで今の良い雰囲気の中学校があるのだということを感じた。実習校で出会った先生方のように、私も学び続ける人でありたいと強く思った。

4 成果と課題

実習の感想として、教師の仕事の内容が多岐にわたり、その多忙さに驚いたことを挙げる学生が多く見られた。学内での事前学修ではなかなか実感することが難しい側面を、現場での実習において実習生自ら体感し、その中で今後の学修課題を見出すことにつながっていることが窺える。改めて実習を通して学生たちが獲得する学びの大きさが実感される。

このような、実習を通して得られる学修をより有意義なものにするために、より充実した事前学修への取り組みが望まれる。社会人としての基本的なマナーをはじめ、実習校での指導担当教諭、生徒との十分な意思の疎通を可能にするコミュニケーション能力を身につけることが重要課題の一つとして挙げられよう。実際、現場で実習生の指導に当たられている担当者の声として、実習に臨むにあたっての最低限の必須事項として、挨拶・身だしなみ等の基本的なマナー、さらに、自分の考えをわかりやすく伝え、相手の話をしっかり聞く力を挙げている場合が見られる。これらは、いずれも付け焼き刃で身につくものではない。

今後、実習学年の学生に対してはもちろんのこと、(既に行われているが、) 下学年の学生に対しても実習報告会への積極的な参加を促すことを通して、より早い段階から実習を見据えた学修を行っていくことが重要である。